国営事業地区の　将来展望

# 多良間地区を徹底調査

前田建設工業株式会社　九州支店　**三浦弘喜**

**多良間村は、沖縄本島の南西、宮古島と石垣島とのほぼ中間に位置し、多良間島と水納島の2島からなる。琉球王朝時代には、航海上の要所として栄え、島の基幹産業である農業や畜産業の基礎が築かれた。農業はさとうきびを中心に、かぼちゃ等を組み合わせた畑作経営のほか、飼料作物を栽培し肉用牛を飼養する畜産経営が展開されている。一方、島には河川がなく、農業用水は主に降雨に依存しているため、生産性が低い不安定な農業経営を余儀なくされており、農業振興の妨げとなっている。**

**このため、国営かんがい排水事業「多良間地区」（以下、「本地区」という。）により、貯水池を整備することで新たに畑地かんがい用水を確保するとともに、揚水機、用水路等の整備を行い、併せて関連事業において、支線配水路等を整備することによって、農業用水の安定供給を図り、農業生産性の向上及び農業経営の安定に資する計画としている。**

**今回「日本で最も美しい村」や「日本農業遺産」に認定されている多良間島と、本地区の事業内容を取材した。**

## 1　地域の概要

多良間島の地形は北部に海抜30m程度の小丘陵が僅かにあるだけで、大部分を標高５～15mの平坦な低地が占めている。亜熱帯気候に属し、年平均気温は24.3℃、年平均降水量は1,943.2mmである。台風の常襲地帯であり、冬季にも大陸からの強風が吹きつけるが、周囲を海に囲まれ、平坦で風を遮るものがないため年間を通じて強い風が吹く。島の地表には保水力の乏しい風化土壌が薄く分布し、その下部から地下50～60mにかけては、サンゴからなる空隙率の高い琉球石灰岩が分布する。表土は水はけが非常によく、雨水は石灰岩を通って速やかに地中に浸透するため、地表水に乏しく、島の水利用は湧水や地下水のほか、ため池に貯留した雨水に依存している。周囲約15km、土地面積19.75㎢と小さな島の北側一箇所に集落が集まり、約千人の島民が暮らす。このうち農家は252世帯で全戸数の約54％を占める（令和２年多良間村調べ）。



多良間島

## 2　農業の概況

多良間島の基幹産業は農業で、さとうきびを中心に、葉タバコとかぼちゃ等が栽培されている。また、肉用牛の飼養頭数は約３千頭で農業粗生産額の約６割を占め、島の南東部には牧草地が広がる。このほか、山羊は「たらまピンダ」の愛称で呼ばれ、その飼育頭数は約千頭と少なくない。

サトウキビは明治期に栽培が始まり、現在では年２万トン以上を収穫し、黒糖生産量では県内の約４割を占め、日本一の生産量となっている。島内には宮古製糖多良間工場があり、１日250tの処理能力を誇る。品質面においては、平成26年に全さとうきび生産農家が「島ごとエコファーマー」に認定され、農薬・化学肥料の３割減を目標に環境保全型農業の推進に取り組んでいる。耕畜連携による堆肥生産、緑肥のすき込みによる土壌保全などの肥培管理によ

り、さとうきびの生産量と単収が増加するとともに、貴重な地下水の水質保全にも寄与している。

## 3 「日本で最も美しい村」

多良間島は、国内外を含め数多くの観光客が訪れる沖縄県にありながら、いまだ手つかずの自然が残り、島民がお互いを思いやり、助け合いながら、伝統的な島の暮らしを紡いでいる。

平坦な孤島で風の影響を受けやすい多良間島では、琉球王国時代に伝来した「琉球風水」に基づき集落が形成されており、幾重にも配置された「抱護（ポーグ）」と呼ばれる防風林により、自然災害を緩和し、島内での社会・生産活動を可能としている。

抱護は、琉球最高の風水師であり政治家であった蔡温（さいおん：1682-1761）により国家施策として整備されたもので、島の北側に集落を配し、それをフクギの屋敷林と村抱護が囲み、後年に設置された農地防風林と、さらには島全体が浜抱護によって取り囲まれており、他では目にすることのできない独自の景観が現在も残されている。抱護は自然災害の防止のほか、希少種を含む様々な動植物の生息場所にもなっており、自然環境の厳しい島の農業と生物多様性の維持に重要な役割を果たしている。



抱護（ポーグ）に囲まれた集落

また、国指定重要無形民俗文化財に指定された「多良間の豊年祭（八月踊り）」は、４百年近く継承されており、旧暦８月８日から３日間にわたり全島をあげて豊年を感謝・祈願し執り行われる。このほかにも豊穣を祈る伝統祭祀「スツウプナカ」など、今も数多くの伝統行事が継承され、村落共同体組織や「ユイマール（互助）」の精神が現在でも生き続けている。これらの地域資源が評価され、平成22年に沖縄県で唯一、「日本の最も美しい村」連合



多良間島の豊年祭

への加入が承認された。さらには、水資源に恵まれない孤島において、抱護を造成し、厳しい環境での農業生産や社会生活の維持、耕畜連携の持続的な農業システムの構築など、特色ある文化や景観を生み出していることが評価され、令和７年に沖縄県で初めて、「日本農業遺産」に認定された。

## 4 水利用の形態

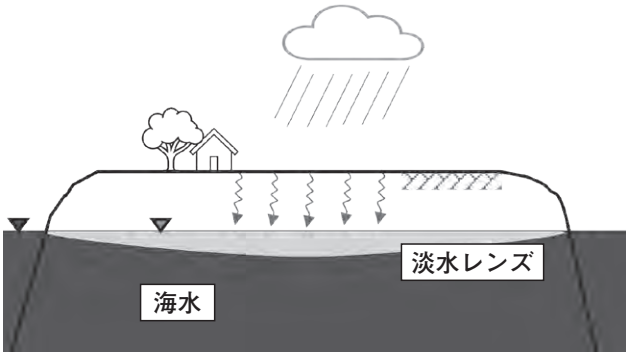
農業用水として利用できる水源は、農地や道路等から流出する雨水をため池に集めて利用する地表水と、淡水レンズとして存在する地下水が対象となる。地表水を集める既設のため池としては、集落の背後地にある丘陵地の林地を流域にして集水路を廻らし、流出した雨水を貯留する５万トンの「トゥカパナため池」が昭和初期に整備されたほか、沖縄本土復帰後に６箇所のため池が設置された。



トゥカパナため池（仲筋ため池）

一方、地下水は淡水レンズからの取水による利用となる。多良間島の琉球石灰岩には、周囲の海水が下層部に侵入しており、雨水が地盤中に浸透すると、比重差によって淡水が海水の上に浮いた状態でレンズ状に溜まり、島の中央部では厚みがあり、海岸に近づくにつれて薄くなるため、その形状から「淡水

レンズ」と呼ばれている。淡水と海水の微妙な圧力バランスによって形成され、降水量や井戸からの揚水量、海水準の変化にも大きく影響を受ける上、唯一の生活用水源となっている貴重な水源である。




淡水レンズのイメージ図

## 5　事業の目的及び必要性

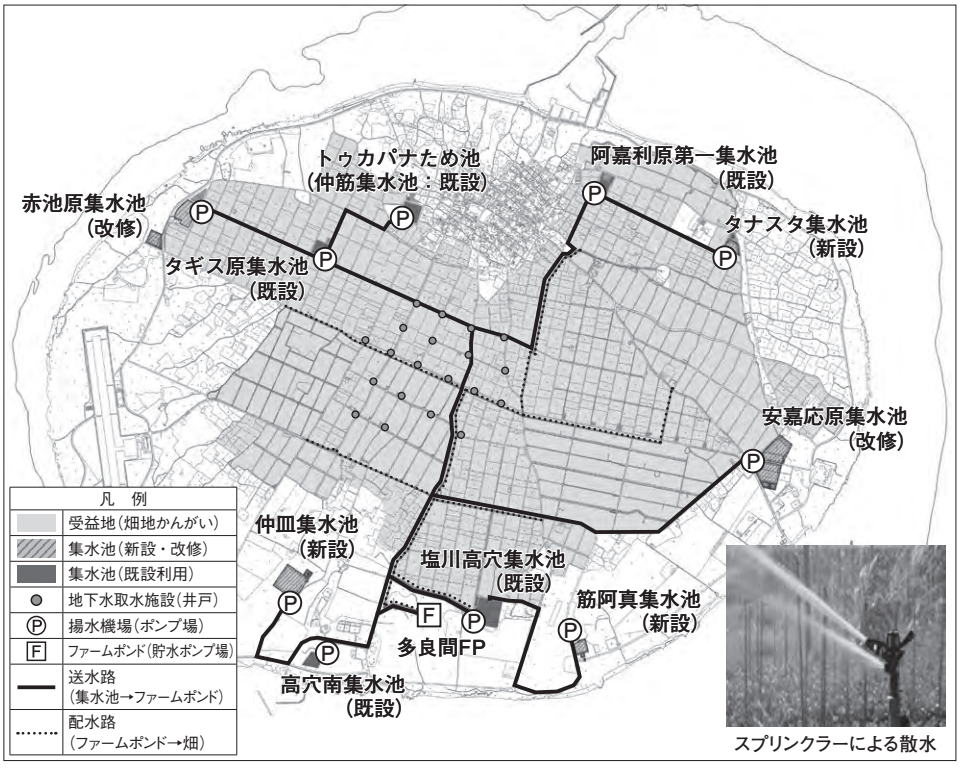
本地区の農業用水は、既設のため池や県営かんがい排水事業等で造成された用水施設によって、一部の農地へは配水されているが、営農状況の変化に伴い水需要が変化しているとともに、大部分の農地では水手当てがなされておらず、依然として降雨に依存しており、恒常的な水不足をきたしている。また、ため池の水は隣接する給水所からトラックに積んだタンクで運搬する必要があるほか、用水施設が未整備なため、野菜など園芸作物の栽培が困難な状況にあるため、農業生産性が低く、営農上の支障となっている。

このため、本地区では、集水池の整備により、新たに畑地かんがい用水を確保するとともに、揚水機、用水路等の整備を行い、併せて関連事業において、支線配水路や畑地かんがい施設等を整備することにより、農業用水の安定供給を図り、農業生産性の向上及び農業経営の安定を図ることとしている。

## 6　事業計画の概要

本地区は、多良間島の758haの農地を対象に、令和８年度から令和17年度の事業工期で、総事業費275億円で実施される計画となっている。事業では、水源の確保のために集水池５か所、揚水機場、管水路、ファームポンドなどを整備する。

農業用水は、道路や畑地等に降った雨水を集水池に貯留するとともに、淡水レンズの地下水を補助水源とし、これら水源から揚水ポンプで高台のファームポンドに管水路を通じて送水する。各ほ場までは関連事業により支線配水路や給水栓、スプリンクラー等を整備する。ほ場でのかんがい方法は、さとうきびや露地野菜はスプリンクラー、施設野菜や果樹は点滴チューブ等でかん水する計画としている。






スプリンクラーによる散水

多良間地区　一般計画平面図

多良間地区の主な工事内容

| | | |
|---|---|---|
| 主要工事 | 集水池（新設・改修） | 5か所 |
| | 集水池（既設利用） | 5か所 |
| | 地下水取水施設（井戸） | 20か所 |
| | 揚水機場（ポンプ場） | 10か所 |
| | 用水路（新設） | 24km |
| | ファームポンド（新設） | 1か所 |
| | 水管理施設（新設） | 1式 |



水管理施設（イメージ）

## 早期の整備を待ち望む地元の声



**森山実夫 氏**
多良間村
国営土地改良事業推進
協議会推進委員
（施行申請人代表）

多良間島には河川がなく、表土は僅か40cmと浅く、その下には透水性の高い琉球石灰岩が広がっています。水源に恵まれない孤島において、長きにわたり人々が暮らし、農業を営み、黒糖の生産量では日本一を誇ることができたのは、琉球王国時代の風水思想を応用した抱護を大切に守り、限られた資源を最大限に活用する持続的な農業システムを構築したことによります。

一方、これまで幾度となく大干ばつに見舞われた歴史的経緯から、孤島である多良間島における水資源の欠乏は島民生活の存立を左右する重要な問題であり、抱護の防風機能とならんで、多良間島の農業システムの成立に不可欠な要素であるため、我々島民は、天候に左右されない安定的な水利用による「水あり農業」を切望してきました。

このたび、国営かんがい排水事業「多良間地区」が着手され、関係者一同誠に意義深く喜びを大きくしており、期待と感謝の意を表するところであります。

水あり農業が実現しますと、さとうきび生産量の安定、園芸作物や高収益作物の栽培による農業経営の向上が期待されます。農業所得の増加により、若者の新規就農や島外に離れた若者が島に戻るきっかけとなり、さらには定住促進にもつながり、雇用創出効果、観光振興、コミュニティの強化など、農業にはじまり、農業にとどまらない多大な効果が期待されます。

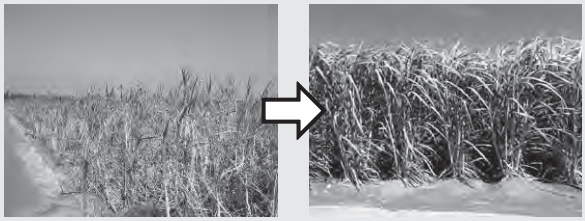
多良間島は、「日本で最も美しい村」、「日本農業遺産」として評価されたとおり、伝統行事を継承する豊かなコミュニティを維持し、抱護をはじめ、いにしえの知恵を受け継ぐことで限られた島の資源を守り、小さな島を持続可能なものにしてきました。国営事業を契機として、将来的にも持続可能で安全安心な農業生産を目指して、農業者や関係機関が連携して事業の進捗を図っていきたいと考えています。

■かん水作業の省力化



水を運搬し畑に散水　　給水栓をひねるだけで畑に散水

■生産量の安定



恒常的な水不足　　生産量の安定

■高収益作物への転換



かぼちゃ　　マンゴー



にがうり　　にんにく

発現が見込まれる事業効果

## 7　事業効果と営農への期待

事業の実施により、安定的な農業用水を確保することで、さとうきび生産量の安定を図るとともに、かん水作業の省力化による余剰労働時間の創出と、これを契機に高収益作物への生産振興と営農の転換を促進することで、農業生産性の向上と経営の安定が図られるなどの効果が見込まれ、地元からも大きな期待が寄せられている。

また、畑地かんがいの導入による新たな営農展開を推進するため、国営事業の調査計画段階、事業実施段階、事業完了後といった段階ごとの営農活動方針を取りまとめた「多良間村営農ビジョン」を策定するとともに、多良間村国営土地改良事業推進協議会の営農部会をはじめ、多良間村高収益作物導入検討会等の支援組織を設置し、多良間村や農業委員会、JA等の関係機関が一丸となって営農推進活動に取り組んでいる。

本事業により地域農業が発展され、島の暮らしがさらに豊かになるとともに、島民が綿々と守り繋いできた独自の文化や風習とあわせ、将来の世代に引き継がれていくことを期待して、報告とする。

【参考文献】
・「国営かんがい排水事業多良間地区概要説明資料」（沖縄総合事務局土地改良総合事務所宮古支所）
・日本農業遺産「地域概要書」（多良間村農業遺産推進協議会）
・「群星」2026年３・４月号（沖縄総合事務局）
・写真図面提供（沖縄総合事務局宮古圏域農業水利事業所）